

には、純情や悲劇性は稀薄になつていゝわゆる「女ものがたり」という類型になつてくる。したがつて、これらは写実という技巧に新しい進境は示したけれども、内容的に近代性を稀薄にしたということになる。硯友社の作品が人々にあかれ、マンネリズムを示すようになったというのは、このような風俗的傾向をさすものと思われる。

そこで、紅葉はこのマンネリズムを克服するために「心の闇」(二六年)「多情多恨」(一九年)「金色夜叉」(三〇年)を書いたのであるが、これらの諸作には、再び純情と悲恋が大きく浮かび上つてきている。この点、従来紅葉の代表作としてとりあげられている「伽羅枕」「三人妻」などは、むしろ、その位置を失うべきものではないかと考えられる。

このように見てくると、二十年代の小説の特質として、純情と悲恋はまさに、その中心に位するものと見られる。

とくに、斎藤緑雨が「油地獄」などで、写実は果し得たが、純情を否定的にあつかつたのと思ひあわせると、硯友社の新しさがはつきりするであろう。やはり、写実のみに新しさおもしろさがあつたのではなく、純情と悲恋という時代の人間的な課題を、取りあげたから、おもしろさ、よさが生まれてきたのである。

もう時間が来たので、割愛しなければならないが、透谷

落伍者の文学

——啄木論の一視点——

(1)

文学者のさまざまの型のうちに、われわれは一つの顕著な日本の特性として落伍者の文学の系語を措定することができる。それが日本の民族の文学心をつよくひきつける理由は、まだ十分に説明されていないが、伝統的に強力なもので、われわれが文学を受容する際の心理的傾斜として前提されていることは事実である。

落伍者とは、もちろん実生活上のつらい緊張を必要とする戦線からの脱落者である。時代によってその戦斗の種類や内容はさまざまであり、戦斗からの離脱の様相も多様であるが、実生活に敗北した点は共通している。もちろん多くの人々が実生活の上で経験する一般の落伍者はここでは問題ならぬ。そういう落伍者にしてなお文学活動を継続した人々だけを対象にするわけであるが、こうした人々の実生活とその文学的創造的活動とは、内面的に深く結びあ

や露伴の超現実的な世界での純情や悲恋の追求、二十年代末の、深刻小説や観念小説における純情と悲恋、また一葉の初期の小説などこの問題と関連するところは多い。また、明治小説の方法上の特質であるフィクションとこの純情と悲恋との関係なども、興味あるところであるが、また次の機会にお話ししたい。

受贈誌(31・7—32・2)

| | |
|------------------------|-------------|
| 法政大学文学部紀要 No.3(日本文学篇)一 | 法政大学文学部 |
| 人文科学紀要 第九輯(国文学)Ⅲ | 東京大学文学部 |
| 高知大学学術研究報告 第四卷 | 高知大学 |
| 西京大学学術報告人文 | 西京大学 |
| 清泉女子大学紀要 三 | 清泉女子大学 |
| 東洋大学紀要 第六・八輯 | 東洋大学 |
| 滋賀大学紀要 第六号 | 滋賀大学文学部 |
| 金沢大学文学論文集 四文学篇 | 金沢大学 |
| 日本大学世田谷教養学部紀要 第五輯 | 日本大学世田谷教養学部 |

国崎望久太郎

(2)

っているし、文学の本質を考察する場合にも非常に大事な契機をふくんでいるように思われる。われわれは落伍者の文学の系譜に、もう少し注意を払う必要がある。そこでは顕微鏡によって見られた細胞のように、文学と実生活との関係が、拡大された明らかかな形で示めされていることが多い。文学の面白さには、こうした実生活との関係から喚起される部分が多いことも事実である。

近代の作家を念頭にうかべる時、人生の途中で挫折した人々の数の多いことに痛ましい思いを禁ずることができぬ。自ら生命を絶つた眉山、透谷、龍之介、春月、有島武郎、太宰治をはじめとして、窮迫の中に文学者としての生命を消耗し尽したかに思われる一葉や啄木、葛西善蔵や嘉村磯多等の作家の生体験は、まことに特殊なものであった。中途で挫折したという点では小林多喜二の例があるけれども、

彼は天皇制権力の野蛮な拷問によって無惨にして悲痛な死に至つたのであるから、此の系列には、もちろん入れられるわけには行かぬ。自殺した作家や殆んど窮死に近い生を終えた作家であつても、彼等をおしなべて落伍者とみることはできない。またその文学も落伍者の文学とみることもできない。そこには微妙な相違がある。われわれが落伍者の文学と呼ぶとき、そこには時代の文学精神の前進から落伍したという痛切な意識による必死の表情が感じられる場合に限定する必要がある。だから一葉は若くしてみまかつたが、むしろ自己の文学的可能性については夢想を持ちえた。子規も病苦の間に長くない生涯を閉ぢたが、その文学はすこぶる健康であつた。善蔵や磯多は実生活の上からは、まさしく落伍者に違いないけれども、彼等は芸術至上主義的な信仰を持ち得た点において救われていた。だからわれわれは自己の文学的仕事に自信をうしない自ら死を選んだ作家たちの系列を念頭にもてばよからう。彼等が客観的に実生活上の落伍者でなかつた場合にも落伍者意識は共有していた。文学的に自己の表現が、時代の要求に隔離されているという意識にさいなまれたわけである。

(3)

石川啄木をこの系列においてみることに人々は奇異の感を抱くであろう。なぜなら従来、啄木は浪漫主義詩人とし

の一つにすぎない。けれどもわれわれがさきの固定した啄木像から解放されるだけの消極的な意味はもちうるだろう。現在必要なのは固定化した見解から解放されることである。啄木は一九〇二年明治三十五年十月、岩手県立盛岡中学を五年生の時中退した。彼の一生の挫折が、この時の青年客気に由来しているとのみみることはできないが、正規の学歴を欠いたために、啄木のうけた実生活上のハンディキヤップは可成り大きなものであつた。それに気付いて東京で私立中学へ編入試験を受けようとしたが、それも果せなかつた。明治の社会は学歴によつて実生活上の序列を規制する風習を頑なに守つたから、啄木が生活を展開向上せしめようとする際にさまざまな困難をもたらした。小学校教員になる資格さえ得られず、代用教員をもつて甘じねばならなかつた。「日本一の代用教員」をもつて自認したとしても、代用教員は代用教員であり、社会の待遇はそれに相応した。三十九年の年譜は「月給八円。時に食事を欠くほどの窮乏にあり」と記している。その後の北海道における新聞記者生活の変転もその必然的な展開であつて窮乏を打開する機会はなかつた。

啄木が社会の下層に沈溺することに嫌悪を感じ、そこからの脱出に必死の期待を抱いた時でもそれは全く遇然の機会をまつのみであつた。明治四十一年四月、釧路をさり、単

て出発し、自然主義の観照性を批判し、「時代閉塞の現状」の評論において、いち早く社会主義文学への道を指摘した戦斗的革命的詩人とされているからである。啄木の、先駆者としての明敏な頭脳と直観とは、プロレタリア文学への豊富な可能性をふくむ遺産であつた。——一応はこれでよいという妥協的な考えをするより、むしろ今日では、この定説化している啄木像を根本から再検討してみる必要がある。この啄木像はプロレタリア文学の発展過程の中で形成されたものであつた。戦後の啄木研究も、その小説の再評価や伝記研究の精緻化として相当前進したことは確かであるが、殆んどそのすべてが戦前の啄木像を壮厳する仕事に捧げられている。根本的な批判がない。だから右のような啄木の文学史的栄光に関する定説は、既に定説ではなく伝説である。伝説は客観的歴史の批判の追求をまぬかれることはできない。私が若い諸君の新鮮な感受と批判に期待するのも実にこの点である。諸君は啄木を愛するだろう。愛するとは対象の批判的構成にまでいたることである。だから自由なきさまざまな視点を用意してもおかしい筈はない。出来るだけ客観的に把握しようとすることと矛盾するわけのものでもない。

啄木の文学に「落伍者の文学」的性格をみようということは、もちろん啄木文学にアプローチする多くの試みの中身上京して新詩社に投じた時も、生活上の実際的な顧慮は少しもはらつていない。五月以降は金田一京助の下宿にこるげこみ、物心両面の援助をうけることによつて、かろうじて小説家としての生活に出発しようとする。けれどもこの時二十三才の啄木に、文壇がそれほど寛大である筈もなく「小説の売込みに狂奔すれども殆ど成算なく、妄想と不眠症に悩まされ、且つ川上眉山の生活難による自殺に衝動を受く(年譜)」という状態であつた。翌四十二年二月初日新聞に、校正係として月給二十五円、外に夜勤手当一夜一円の約束で入社した時、漸く啄木の生活上の基礎ができたように見える。けれども啄木の扶養すべき家族は両親と妻子、妹があつた。内部には家庭の不和があり、病気があつた。この前後の啄木の経済的窮乏はその日記と手紙によつて精しく知ることができる。貧乏は彼の一生につきまとうていた。特別に浪費癖があつたわけでもないが、それと戦う現実的な手段や処理能力を欠いていた啄木は、愈々窮迫をかさねざるをえなかつた。

彼の経済的困難は四十四年二月、大病院三浦内科で受診、慢性腹膜炎と決定した以後更に肺結核の悪化と共にいよいよ甚しくなつた。その惨状の中で遂に翌四十五年四月十三日、その多難なりし生涯を終つた。身近かにいた友人達はやれやれという思いをもつて、この薄幸な詩人の葬儀

を執りおこなった。

(4)

啄木は生活者としては明らかに落伍者であった。勝気で自己の才能にたのむことの多かつた啄木には、この事實は辛棒しがたい現実であった。彼は現実を失うことの多かつた自己の生活を文学の世界に求めた。実生活にうしなつたものの代償をとまかく、文学の世界で発見する方法を手にしえたところに啄木の悲しい幸福があり、またそれがその文学の迫真力の秘密な源でもあった。「歌は私の悲しい玩具である。」という方法論の把握がこれである。また思想的追求と理論的活動とが、その実生活を認識する上に新しい相を加えたことも多大であった。かくて彼の文学的理論的世界が生れ、それはあわただしい歩みであつたにしろ、浪漫主義自然主義を経て、更に社会主義文学への方向を指ししめたものであつた。

彼はそれによつて文学的先駆者とされたのである。それではこの生活上の落伍者は落伍者たる痛切な経験の代償として、文学上の先駆者としての仕事を果して遂行しているであろうか。今までわれわれは多少安易に啄木文学の素質を過大に評価しているのではないか。

彼が詩集『あこがれ』を刊行して明星派の浪漫主義詩人として詩壇の片隅に登場したのは、明治卅八年二十才の五

月であつた。この詩集についての研究もまだ十分ではない。

模倣に巧みな技巧的な詩であるとみたり、「自己の生活と経験をいかに時代思潮と結びつけて自己の思想と人生観を追求したかを実証した」(窪川鶴次郎)詩集とみられたり、其の間に十分な統一の見解はない。けれども確に後者の見解が前提にしている啄木の浪漫的知性は特長的なものであつた。泣蕁・有明をはじめ当時の詩人たちから詩的技巧を奪取し、その模倣ないし亜流とみられる作品をつくりえたのも、そうした浪漫的知性によつてであつたともいえようである。彼がこうした詩人的出発をした明治三十八年は、明星派の全盛期は既に過ぎかけ自然主義文学がその力強い運動の出發をなした時期であつた。むしろ前年あたりから自然主義運動は盛んになりはじめている。時代の新しい思想に接触するには啄木はあまりに遠くにおり、その自然主義思想の現実性を理解するには、若く且つ浪漫的でありすぎた。

だから啄木は文学史的に正確にいえば時代遅れの浪漫詩人として自然主義文学運動の形成期に登場してきたのである。北海道で苦しい現実生活の体験をかさね、自然主義文学を理解するにいたる文学的思想的径路はいまは云われない。

とまれ彼が自己を自然主義文学者として規定した明治四十一年、あるいは「食ふべき詩」に自然主義的詩論をかけた翌四十二年、こうした時期には自然主義文学運動は既に類

癡期に入つてしまつていた事實をわれわれは注意しよう。

彼は急速にあるいはあえぎあえぎ新しい思想へ自己を結び付けようと努力した。そして其処に到達した瞬間、既に時代の文学動向は別の方向に向つていた。其処に啄木の悲劇がある。彼はその文学も思想も落着いて成熟させることができない。そこに彼の文学的主体性の弱さの必然性がある。感傷的であるのは、彼の短歌作品のみの特長ではない。その思想と評論活動の全体を通じる共通した特長である。こういうように一概に評することはもちろん正しくないかも知れぬ。特に自然主義文学の時期における啄木は、自己と自己の生活への反省と凝視を続けている。けれども若さをもつ抽象的論理の明快さにひかれて、現実の重みを全身をもつてうけとめている姿勢はない。

(5)

明治四十三年の六月、所謂大逆事件が起り、自然主義運動に内含されていた民衆の民主的諸要求、人間的諸権利についての思想は徹底的に弾圧される危機に見舞われた。文壇の反響はさまざまであつた。啄木は既にこの年二月にかいた評論「性急な思想」において自然主義運動が「国家という既定の権力に対しても、其懷疑の鋒尖を向けねばならぬ性質のものであつた」ことを指摘していた。幸徳の事件によつて強い衝動をうける心理的準備はあつたのである。

このうち社会主義関係の書物をさがしはじめ、四十四年一月友人瀬川への手紙の中で「自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。」と云うに至つている。啄木の社会主義思想の性質及び内容については、しばしば論じられている。けれども自己を社会主義者と規定することが、如何なる現実の意味をもつてであろうか。この点は果して主体的に深く啄木によつて考察されたであろうか。社会主義思想及び社会主義運動の歴史的展開と啄木のこの自己確認とを比較してみる時、此処でもわが啄木はまた悲劇的であつた。徹底的弾圧によつて運動自体が壊滅にひんした時、彼は社会主義思想にたどりつき、其処に自己の立脚地をおこうとしたのである。

まもなく訪れた死によつて、彼の社会主義者としての活動は知ることができない。多少の計画や空想は語られているが、それによつて革命的詩人の面貌を覗うことはできない。先駆者としての文学史的光荣を彼に許す唯一の論理は、自然主義文学の批判的帰結は社会主義であり、社会主義文学はプロレタリア文学によつて継承されるということであつた。この論理の抽象性は、その後の文学史の具体的展開によつて明らかになつてはいるが、それでもこの觀念の呪縛から解かれることは困難なようである。啄木は晩年社会主義思想に到達した。しかし思想家としては未熟であり、また

体系的な思索に堪える人間でもなかった。そして多くの社会主義思想家が弾圧されたのち、社会主義に共鳴を感じた事実は、彼の浪漫主義・自然主義受容の場合と非常に似ているのを知るのである。

先駆者の苦斗というより、時代の新しい思潮に遅れまいとして真面目な思想的前進に焦っている若者の印象が強くなるであろう。その不安と焦燥とは、さきの実生活上の落伍者であった事実と微妙に照応している。また文学的思想的前進の点においてもいつも落伍しているということ、必死の追求の果てに獲得された文学的思想的立場は、文壇のあわただしい「性急な思想」的前進によって既に彼と隔絶しているということ、——こうした点からも啄木を観察する必要がある。彼は自己の豊かな可能性を開花させることによって、文学的運動の中心的推進力となることがなかった。ただ生活派短歌の創造において、彼の文学的主体に適応した形式を発見したわけであるが、彼はそれを強いてみとめまいとした。一つの才能の不幸な虐殺がある。それでも彼はこの抒情詩的方法によって救われているのである。

(6)

啄木以外にも多くの落伍者があり、その文学があった。時代と歴史の性格によってそれぞれの個性の実質は違っている。それをひとつひとつ解きほぐすことが大切であるが、

われわれの文学を享受する心的傾向に、こうした落伍者に対する判官ヒイキ的な偏愛があることは警戒せねばならぬ。判官ヒイキはわが民族の精神構造の顕著な特質であるし義経伝説をはじめ多くの伝説を形成せしめた。今、啄木が若

くして天才的詩人であり、人生のありとあらゆる悲惨を経験し、美しい恋愛をし、悲哀に満ちた歌を作り、遂に落伍したということによって、彼に革命的詩人としての先駆的後光を与えることには、慎重であるがよい。われわれは啄木伝説の形成をその研究史の中に指摘することによって、啄木がおかれていた歴史的位相により近く接近する道をさがさねばならない。そうしてこそ啄木を正しく把握することができるだろう。そこには革命的詩人のかわりに文学的主体性のか弱い、しかし鋭い歌人啄木がいるかも知れない。思想家啄木ではなく、生活派短歌の創造者としての意義が再評価される機会が生じるかも知れない。もちろん、ここでみたように落伍者としての啄木をみることは、その一視点からの観察にすぎない。それは当然である。しかし用意してよい視点であることは確かである。

文学教育の構想

——「小僧の神様」の鑑賞をめぐる——

水田潤

夢殿の救世観音を見てみると、その作者といふやうなものはいく浮んで来ない。
志賀直哉

文学教育とは、文学によってすぐれた人間をつくり出すこととする教育活動である。文学が人間形成に関与し、教育性をもつのは、そこに示される典型が、読者に人間や社会の全体的な把握をさせ、自己の小さな世界をおしひろげ、人間性を変革していくところにある。すぐれた文学は、われわれから人間の価値についての自覚をひき出し、現実のたむかす勇氣と力を与える。しかも、人生いかに生きべきかという問題は、文学においては直接に教訓として与えられるものではなく、文学享受の感動の掘り下げをとおして具体的につかみとられる。そうして、文学教育では、その感動を孤独な個人のものにとどめないで、感覚や思想のちがった人間どうしが人間としてじかにふれあい、時には

対決することによって、おたがいの断層やみぞをなくすることができると。ここに文学教育が、たんに教師によって行なわれる学校教育としてのそれだけではなく、広く家庭や友だちどうしの人間交渉としてもその意義が認められねばならない。

ところで、読者にとつては文学はかならずしもこうした意図では読まれない。文学は普通には娯楽のために読まれ、あるおもしろさへの期待によって価値づけられている。われわれは文学教育の主張に、文学が有閑階級的な遊びやアクセサリーとして読まれることに反対し、問題意識のよびおこしを言うが、文学の本質や機能と、読者の作品への姿勢を混同して論じることが、文学教育を混乱させ、文学教育をカサカサとしたものにしてはこなかったかということに謙虚にふりかえってみなければならぬ。こうした立場から、わたしは「読者がわに立つ価値的な読みとり」を